

〔資料〕

英国の医療における WBL(Work Based Learning) の実際 (第2報) —プライマリケアにおける WBL—

小田 和美¹⁾ 両羽 美穂子²⁾ 服部 律子³⁾

Work Based Learning for Health Care in UK Part 2: WBL in Primary Care

Kazumi Oda¹⁾, Mihoko Ryoha²⁾, and Ritsuko Hattori³⁾

I. はじめに

英国には、医療専門職の生涯教育に Work Based Learning (以下 WBL とする) という概念があるということを知り、直訳のとおり“仕事を基盤にして学ぶ”ことが、岐阜県内の看護の質の向上を目指している本学の理念に通ずるのではないかと考え、興味をもった。そこで、この考え方や具体的な方略を学び、現場看護職の生涯教育の1つとして示唆を得ることを目的に、WBL をプライマリケアの分野で先駆的に行っているロンドンを訪ねる機会を得た。

英国は、1997年にブレア首相の労働党が政権に返り咲いてから、サッチャー政権で荒廃した医療を改善すべく、NHS (National Health Service) 改革に取り組んでいる。NHS 改革の特徴のひとつにクリニカルガバナンス (Clinical Governance) といわれるものがあり、これは臨床現場に近いところに権限委譲するとともに、医療の質向上について臨床現場に当地責任をおく系統的アプローチを行うという政府の方針をさしている。プライマリケアについては、英国の伝統である予防的、包括的、全人的医療をおこなう Primary Care Trust (以下 PCT とする) がつくられ、その地域における第一次医療を担っている。さらに、2000年の「The NHS Plan」において、英国の医療の中心に第一次医療 (プライマリケア) をおく体制が強調され、PCT の役割が増してきている。一方、

医療体制の改革とならんで医療従事者の質的向上も図られ、既に現場で仕事をしている人々の「専門職としてのキャリア開発、現職教育」に多くの予算が割かれている。特に GP (General Practitioner) の質の向上は大きな課題であり、GP の生涯教育 CME (Continuing Medical Education) は、職業訓練 (Vocational Training) とならんで卒後教育の根幹となっている。さらに、最近では CME は CPD (Continuing Professional Development) という言葉に代わり、医療に関わる様々なスタッフを含めたチームとしての学びが重視されてきている¹⁾。

キャリア発達・現職教育のために、英国では生涯学習 (Long Life Learning) が重視され、WBL はその重要な概念のひとつである。

第1報では、英国の医療事情とブレア政権での NHS 改革、それに伴う医療スタッフの生涯教育としての WBL について、特にプライマリケア領域に焦点をあてて述べた。第2報である本稿では、現地で見、聞きしたプライマリケアにおける WBL の実際について報告する。

II. 英国のプライマリケアにおける WBL の実際

まず、筆者ら3人は、初日に WBL に関するジャーナルを刊行している Deanery を訪れた。Deanery は、NHS の1つの機関で医療スタッフの教育に関する体制を整

1) 岐阜県立看護大学 成熟期看護学講座 Nursing of Adults, Gifu College of Nursing

2) 岐阜県立看護大学 機能看護学講座 Management in Nursing, Gifu College of Nursing

3) 岐阜県立看護大学 育成期看護学講座 Nursing in Children and Child Rearing Families, Gifu College of Nursing

えることや研修の機会を設けるなど、人材育成をととして医療サービスの質の向上に貢献していく使命をもっている。そこで、NHSの政策に関する概略とその中でのDeaneryの役割、およびWBLの実際について説明を受けたあと、翌日から対象の中心をGPとしたWBLが行われている現地において視察を行った。

ロンドンでは、NHSがborough(区)単位でPCTをつくり、それぞれが独立した機関としてその地域のプライマリケアに関する医療政策を執行している。筆者らは滞在期間の前半、North East Londonの1つのboroughであるTower Hamletsを訪れた。

1. GP Education Meeting

筆者らは、この地域のPCTのオフィスに近く位置し、町の中心的なhospitalの建物の一角にあるEducation Centreというミーティングのためのスペースに案内された。このEducation Centreは数年前に地域の医療スタッフの研修場所として新設されたとのことであった。この地区の案内役は、Deaneryの臨時職員であり、GP tutor (tutorについては後で詳述する)でもあり、また大学で講義も行っているNurseである。彼女は自身が運転する車のトランクから荷物をたくさん取り出し、その荷物を会場に持ち込んだ。荷物の中身は多くの食べ物であり、会場につくとそれらを机に並べLunchの準備となった。この昼食代はPCTの予算から支払われている。

GP Education MeetingはGPのための研修であり、12週間を1セッションとし、午後から開催されている。参加者はその日の午前中の診療を終えて集合し、来た人から自由に立食形式で昼食をとりながら、会う人と挨拶を交わしたり会話をはずませている姿が印象的であった。

このセッションでは、医療倫理など21のトピックスについて研修を行うスケジュールが組まれており、この日のテーマはメンタルヘルスについてであった。Education Centreには昼食会場となるオープンスペースを中心に4つの会場があり、その各部屋で15名程度のGPに対して講義形式でのMeetingが行われていた。

表1 GP Education Meeting Programme

Spring 2005 Tutor Developmental Workshop "Supporting GP Appraisal and GP Appraisers"	
Programme	
9.30	Opening round of current practice and current issues in supporting GP Appraisal
10.30	Small group work and plenary - Tutor Core Activities
11.00	Tea/Coffee
11.15	In pairs - Experience with Appraiser support
11.45	Feedback and Appraiser support scenarios in large group
12.45	Lunch
1.30	New developments from the Deanery Perspective
2.00	Large group discussion - Elements of the ideal Appraiser support group
3.00	Final plenary - The link between the day's work and the QA of Appraisal
3.30	End

2. Tutor Meeting

Tutorは、各地域のDeaneryによって募集され、Deanery主催の定期的な会合に参加するなど研鑽を積み、各地域に必要な教育活動に従事している。当初は無給でボランティア的なものであったが、現在はそのポストと活動に対する報酬が保障されている。また、最近ではGPだけからなるTutorというより看護師やその他の医療スタッフなどからなるPrimary Care Tutorという考え方になっている²⁾。

筆者らがLondonを訪れた3月には偶然、年に数回のTutor Development Workshopが催されるということで、そのワークショップに参加することができた。これは、一日を通したセミナーで、その日のテーマは、"Supporting GP Appraisal and GP Appraisers"であった。参加者は、ロンドン全域のTutorであり、この日は司会者2名を含めた19名のGPとオーガナイザーとしてDeaneryの職員が参加していた。

テーマにある「評価」について述べると、英国のGPに関しては、NHS発足以来この50年で継続的な自己評価の必要性が急速に認識されるようになり、いろいろな形で行われるようになってきている³⁾。その中の1つにGPをpeerで評価するシステムがあり、その運用を目指しているということであった。しかしながら、現状の問題点として、GPは評価されることに慣れておらず、抵抗することが多い。また、peerで評価することの意義や恩恵を理解していない者がいることが問題としてあげられていた。その背景として、GPの免許更新の要件になっていないことも一因のようである。一方、Nurseは、

表2 Protected Learning Time Programme

Protected Learning Time	
Programme	
1.40p.m. - 1.45p.m.	Introduction
1.45p.m. - 2.00p.m.	How to Become Involved in Enhanced Services
2.00p.m. - 2.45p.m.	Everything a practice needs to know - SLA/commissioning process Accreditation and monitoring Payment Audit
2.45p.m. - 3.00p.m.	Tea/ coffee Break
3.00p.m. - 3.30p.m.	Developing Primary Care Mental Health Services
3.30p.m. - 4.30p.m.	Workshops a) SMI Registers and Physical Health Reviews b) Depression Template for Enhanced Services c) Identifying and Managing Risk of Harm in Primary Care (for front line staff)
4.30p.m.	Feedback from Breakout Sessions/Questions

Nurse マネジャーより常に評価されているので、評価に関しての抵抗感は少ないとのことであった。

今回のワークショップの内容は表1のとおりであり、会の始まりには、全体でそれぞれの最近の活動や課題について発表していた。これは、Tutorとしての活動に共通した方法はなく、それぞれの地域に必要な教育活動を各Tutorが工夫しているためであり、ここでは、それぞれの活動の良さや課題を共有しながら意見を交換するなど peer support, peer review が行われていた。

また、このワークショップでは、3-4人の小グループでの話し合い、3グループに分かれての話し合い、全員での話し合いというように様々な形態を用いて一日中熱いディスカッションを行っていた。どのディスカッションでもその内容を丁寧に記録に残しており、その記録は形を整えて、参加できなかったTutorに情報として提供するしくみになっているとのことであった。

3. Protected Learning Time

これは、2004年に開始された政府から特別予算を得て行っている新しいプロジェクトであり、GPがNHSと契約する際の新しい契約要件の1つである。NHSはその目的を6つあげている。スタッフの継続訓練とその発達を通してケアの質を高めていくことの意味統一をはかる、実践の振り返りを根付かせる、リスクマネジメントを確立する、専門職である個人やチームの発達を促進する、日々の実践に新しい根拠を導入する、個人の過ちから仲間と学ぶ⁴⁾、である。

Protected Learning Timeとは、保障された学習時間

のことを意味し、月に1回午後の時間を学習の時間としてあてている。これまでは日常の診療で非常に忙しく、学習の時間を確保できなかったことから、学習の時間が制度として保証されたことには大きな意味があるといえる。主催はPCTであり、GPだけではなく、医療に関わる全てのスタッフが対象となっている。しかし、参加に関しては自由意思であり、全てのスタッフが参加しているわけではない。

今回はその学習時間に参加することができた。開催場所は前述のEducation Centreを用い、午後からの開催時間に間に合うようにLunchが準備されていた。そのLunchの時間に徐々に参加者が増え、この日も通常どおり総勢45名ほどの参加があった。この日のトピックスは“Enhanced Services”で、午後1時40分から開始となったセッションの具体的な内容は表2のとおりであった。

4. Self Directed Learning Meeting

Self Directed Learning MeetingもWBLの理念のもとに行われている学習形態であり、今回月に1回行われているmeetingに参加することができた。参加者はすべてGPであり、この日は約10名程度の参加であった。このMeetingはこの地区のある診療所内の待合スペースを利用して行われた。開催時間は診療の合間であるランチタイムを使っているため、診療所のオフィスに参加者の為の十分なLunchも用意されていた。参加者は随時集まり、狭いスペースながらも談笑しながらの和やかなLunchであった。予定の時間になるとこの日のテーマである“Dementia”と“Community Mental Health

Work Family”についてのプレゼンテーションがあり、その後数人ずつの3グループに別れ、症例を使って45分程度のグループワークを行った。その発表を全体で行い、14時20分頃解散となった。しかし、このMeetingでは、途中から参加する人や退席する人が何人もみられ、日常の診療の貴重な時間に行われており、参加者が時間に追われている様子が伺えた。こういった貴重な時間にもかかわらず、参加しているGP達は、どの人も自分自身の専門職としての発達や医療サービスの質を高めていくことに真摯に取り組んでいた。

英国では医療サービスの質の向上も各地域のニーズに応じた形で発展していけるように考えている。今回研修した診療所がある地区は、主な死亡原因の1つに精神疾患があがっているほどに、精神的な問題が全地域レベルとなっている。中でもこの地区はマイノリティと低所得者層が多くその問題が深刻な地区であることが伺えた。このように、GPはそれぞれの地区に特有の問題に日々直面しており、また、患者を病院に送るまでの間、すべての症例に対処していかなければならない。こういった状況の中、自分たちが抱えている問題や課題に自分たちで取り組んでいくという意味で、Self Directed Learning Meetingが位置づけられている。

Ⅲ. プライマリケア領域の看護におけるWBLの実際

筆者らは、滞在期間の後半に、英国のプライマリケア領域の看護におけるWBLについて研修する機会を得た。看護におけるWBLの研修は、North West Londonのなかでも西の端のヒースロー空港に近いHillingdon PCTにおいて行われた。このboroughは、他のboroughと異なり、PCTとMental Health部門、HospitalがひとつのTrustとして組織されていた。他のboroughでは、通常、Mental Health TrustとHospital Trustは別のTrust組織となっている。ここでは、Hillingdonの管理部門のHeadでNurseである女性が案内役であった。

はじめに、Hillingdon PCTの事務所であるKirk Houseにおいて、Hillingdon地区の特徴と、組織と大学と提携した教育体制の概要について説明を受けることから研修が始まった。

1. Tuesday Club

文字通り、火曜日に行われているために「Tuesday

Club」と名づけられているもので、Pre-registration Nurse Programmeである。これは、その地区の様々なクリニックで実習をしているPre Registrationの看護学生が、火曜の午後にひとつのクリニックに集められ、臨床の専門家からの講義を受けるものである。講義のテーマは様々で、Lecturerは大学の教員ではなく、そのテーマにおける臨床の専門家が担当している。これは、大学教育のカリキュラムに含まれており、実習(practice)の一環として行われている。英国では、Pre-registration nursingの教育を、50%理論学習(theory)、50%実習(practice)で行っているため、このようなプログラムが組まれているようである。

この日の参加者は、大学2年生13名であった。テーマは、「糖尿病」で、Diabetes Specialist Nurseがパワーポイントを使って講義を行っていた。学生にはパワーポイントのハンドアウトが配布されていた。講義の内容は、糖尿病とはどのような病気か、インスリンの機能、1型糖尿病、2型糖尿病、リスクファクター、症状、診断、合併症、治療の目標、食事療法と運動療法、薬物療法、UKPDS、低血糖とその治療、シックデイで、最後にさらに詳しい知識を得るためのウェブサイトが紹介されていた。これらの内容は、ごく基本的な知識提供で、看護というよりも医学知識の提供であり、大学での講義が少ない分を補っているようであった。

2. Mentorship in practice session

Mentorとは、臨地での学生指導をする役割のNurseのことで、いわゆる日本でいうところの「臨床指導者」であるが、英国の看護教育では「指導者」である「Tutor」という言葉を使わず、「Mentor」という呼び名を使っている。MentorとTutorの違いは、Tutorの役割が学生を教えることであるのに対して、Mentorは学生のサポートをするところにある。すなわち、看護学実習におけるMentorshipとは、看護の専門職としての指導、教育的で平等な関係、学生のサポートを意味する。Mentorの役割は、1) 臨床スタッフなどとのコミュニケーションや関係性を作ること、2) 知識や理論、体験の場の保障など学生の学びを支援すること、3) アセスメントの学習を支援すること、4) 効果的な学習環境を保障し、評価すること、5) 看護実践の改善につなげること、6) 研究につながる知識の基盤をもつこと、7) 全体の学習

の評価をすること、などである。

筆者らは、Hillingdon 地区で Practice Educator である女性、パートタイムで補佐をしている Health Visitor で Practice Teacher でもある女性とともにオブザーバーとして Mentor Meeting に参加した。

この日の Meeting の参加者は、Mentor 5 名と、学生 2 名であった。Mentor は、Buckinghamshire Chilterns University College の Lecturer 1 名、クリニックのスタッフ ナースで District Nurse 1 名、School Nurse 1 名、Health Visitor 2 名であった。学生は、2 年生 1 名、District Nurse のコースをとっている学生 1 名であった。District Nurse のコースをとっている学生は、卒後 2 年間病院勤務、2 年間コミュニティのクリニックで勤務ののち、District Nurse になるために、大学のフルタイム学生として 9 ヶ月の District Nurse のコースをとっており、勤務していたもとのクリニックで週に 2 日勤務、大学に週に 2 日通学、週に 1 日は自宅学習というスケジュールで学んでいた。

最初に、Buckinghamshire Chilterns University College の Lecturer より、Mentor のための評価ドキュメントが配布され、説明がなされた。それは、非常に細かいチェックリストで、学生の達成度が把握できるようになっていたが、大変分厚く、覚えることは難しいように思われた。説明ののち、その内容について討議が行われた。討議が終了すると、そのドキュメントは回収された。Buckinghamshire Chilterns University College は、1 セメスターの「Mentor in Practice」のコースをもっている。

その後、実習についての討議が行われ、議題は、実習時間について、特にパートタイムの学生の実習時間について話し合われた。Buckinghamshire Chilterns University College の Mentorship/Assessor Guidelines も配布され、Mentor の役割について確認された。

最後に、Hillingdon 地区における Practice Educator の女性より、Mentorship についての博士論文の一部が配布され、簡単に紹介された。さらに、Mentor をねぎらい鼓舞するようなスピーチで締めくくられた。

Mentor Meeting とは、臨床現場で Mentor にあたる Nurse がミーティングをもつことで、直接的には実習の充実のための Meeting ではあるが、間接的には Mentor の支援をすることも大きな目的であった。Mentor の

支援は Practice Educator や、Practice Teacher、Nurse Educator があたっていることがわかった。

3. Buckinghamshire Chilterns University College

Buckinghamshire Chilterns University College は、Went London の端に位置し、London 中心部から地下鉄で約 40 分程度のところにある。まわりは英国人が好むいわゆる田舎の風景がみられ高級な邸宅もあるエリアで、200 エーカーの公園のようなキャンパスに校舎や、寮、図書館、研究機関 (Research Centre)、スポーツや生活施設、実習室などが点在している。訪れたキャンパスには、看護学部とビジネススクールがあり、看護学生は全学で Diploma から博士レベルの学生まで約 1500 名いるようである。キャンパスの一部は、古い邸宅を買い取って、そのまま大学の施設として活用しているものもあり、古いものを大切に使う英国の気質を見た気がした。

Buckinghamshire Chilterns University College の看護学部は、Pre-registration、Post-registration の多くのタイプと専門領域のコースを開講しており、学士 (BSc)、修士 (MSc、MA)、Diploma、Certificate などが取れる。また、学位や認定でなく、専門領域を学ぶためのコースも開講されている。コースは、Acute and Continuing Care 領域、Education 領域、Health and Community 領域に整理されており、卒後継続学習のためのコースも充実している。学生は、フルタイムだけでなく、パートタイムでも学べるシステムになっている。

ここには、WBL によって学ぶ「Professional Nursing Studies」のコースがあり、BSc または Diploma をとることができる。筆者らは、WBL のコースの Senior Lecturer かつ Course Leader である教員と、Health and Community Care の Head of Department で Community Nursing Courses の教員の 2 名より説明を受けた。

このコースは、病院で仕事をしながら、大学の単位が取れるもので、大学の教員が週 1 回程度、病院に直接出向いて指導を行い、学生が大学に行くことはほとんどない。現場での仕事そのものが、教育の素材となっている。そのため、応募要件として、現在、決められた 4 つの Hospital NHS Trust でナースの仕事が可能であることが大前提で、その他に RN であり、BSc の学位と diploma のためにはそれぞれ決められたレベルの単位の修得が要求される。期間は、1 年から最大 5 年 (part-time) で、個々

表3 Bsc (Hons) Professional Nursing Studies Programme Structure

Module Code	Module Title	Academic Level (1, 2, 3, M)	Module Type (C, O, P)	Credit Value	Clinical/ Management	Semester Taught
CL323	Using Research in Clinical Practice	3	C	15	N/A	1
CL325	Communication in Health Care	3	O	15	Clinical	1
CL326	Issues in Clinical Practice	3	C/O	30	Clinical	1
CL352	Managing Care	3	C/O	15	Clinical	1
CL327	Managing in Complex Organizations	3	C/O	15	Mgmt.	2
CL328	Managing the Care Environment	3	C	15	Mgmt.	2
CL329	Developing Clinical Practice	3	C/O	15	Clinical	2
CL330	Managing Client/Centre Relationships	3	C/O	15	Mgmt.	2
CL331	Professional Roles and Responsibilities	3	O	15	Mgmt.	2
CL324	Progressional Practice (Project)	3	C/O	30	N/A	2
CL332	Learnig through Professional Practice (Project)	3	O	45	N/A	2

の学生が自分の状況に合わせて期間を決めることができる。現場での実践能力の向上に焦点がおかれ、学生は教育・管理・研究などそれぞれの現場に応じたモジュールを組んで学習がすすめられる。Bsc Professional Nursing Studies の Programme Structure を表3に示した。

IV. 看護職のための学習環境

1. Royal College of Nursing

英国看護職の生涯学習のための環境を提供しているのが Royal College of Nursing である。筆者らは London 中心部に位置する図書館などが入った施設に案内された。ここでは、看護職のための図書が充実しており、必要な会費を支払い会員になれば自由に活用することができる。また、IT を使った情報サービスにも力を入れており、遠隔地であっても必要な文献や情報を入手できるように工夫されている。その1つのサービスとして、ウェブ上で個人のポートフォリオが作成できるようになっており、自分のキャリアを自分で管理できるようになっている。これらの情報サービスは会員以外にも一部開放されており、筆者らのような日本人の旅行者であっても日本看護協会の会員証があれば図書館などを利用できるとのことであった。

2. Buckinghamshire Chilterns University College

前述のように、Buckinghamshire Chilterns University College は卒後継続学習のための多くのコースを持っている。

また、Buckinghamshire Chilterns University College に在籍している Nurse の学習のための Learning Resource

Centre があり、多くの看護の蔵書をもっている。ここでは、学習のためのコンピュータールームや自己学習のガイドとなるような多くのリーフレットが準備されている。

その他、Research Centre があり、主に教員の研究活動に活用されているが、外部からでも依頼があれば共同で研究を行ったり、研究の指導をすることもある。

V. まとめ

1. 今回の研修の概観

今回の研修は、まず、「WBL とは何ぞや」という疑問を明らかにすることから始まった。そして、この疑問がこの研修の最も大きな命題であった。渡英前に英国の医療制度について学習し、研修先である London Deanery の医師が著述した WBL についての唯一の出版物を読んで出発した研修であったが、研修の前半では、「WBL とは何ぞや」という疑問が何度も湧き起こった。研修において参加したさまざまな Meeting はすべて WBL と説明され、最初は困惑し混乱した。それらの Meeting の形態は一見我々が日常行っているものと非常に似ていたからである。しかし、研修がすすみ、すべて WBL であるという視線で、その Meeting の組み立てや参加者の参加の仕方を見続けることによって、「WBL とは何か」ということが見えてきた。それらの Meeting は参加者が参加しやすいように融通がきく形態ですすめられおり、決まりごとは多くなかった。しかし、いずれのプログラムも、その地区ごとに現場に密着した担当者が計画・実施し、現実の課題に即しており参加することが利益になる内容、昼休みなどの参加しやすい時間帯、ついでに参

加しようと思わせるような昼食の提供など、主体的な参加を促す運営がなされていた。これらのことから、NHSが力を入れている事業であり、多くの予算がかけられ、非常に意図的・目的的に組織され、評価され、運営されていると判断できた。WBLは決められた形があるのではなく、Philosophyであり理念であった。

英国の医療システムでは、まず家庭医(GP)を受診して、紹介により専門医を受診することになる。ゆえに、Hospitalはセカンダリケアとして急性期の治療を担う部署であり、プライマリケアもリハビリテーションも高齢者福祉も担う日本の病院とは全く機能が異なる。そこで、英国において、医療の質を改善するためには、プライマリケア領域の医療の質の向上を図ることが第一優先となる。また、移民・難民を受け入れている英国では、多くの移民・難民も英国の医療を担っており、そのボトムラインの底上げも課題となっている。

英国のNHSが取り組んでいるWBLについて学ぶための今回の研修では、前述した英国の医療システムの特徴ゆえに、NHSがWBLに最も力を入れているGP部門から始まることになった。また、看護においても、プライマリケア領域から研修を行ってきた。そして研修の最後に、看護教育におけるWBLについて学ぶことができた。

2. WBLとは何か

London DeaneryのPostgraduate GP EducationのDeanであるNeal Jacksonらはその著書Work Based Learning in Primary Care⁵⁾のなかで、WBLとは、3つの異なるプロセスを通して行われる仕事の役割と結びついた学習とあると述べている。そのプロセスとは、「仕事のために学ぶ(work for work)、仕事において学ぶ(work at work)、仕事から学ぶ(work from work)」である。今回さまざまなWBLの機会を視察し、地域のニーズに合った医療の質の向上を目指した学習、学習者を支える組織的な取り組みや支援者の育成など、NHSの医療改革のための生涯学習の取り組みについて学んだ。そのほとんどがOff The Job Trainingとして研修的に行われていたが、それぞれの学習機会に今の医療現場の課題をテーマとして取り上げていたことから、3つのプロセスが行われていたと考えている。

WBLは、TeachingではなくLearningであり、学習者主体であることが強調されている。英国のNHSは、医

療に携わるすべての人に自ら仕事から日常的に学習し、発展することを意識づけようとしているように思われる。看護は実践の科学であり、最新の知見を学ぶと同時に日々の経験から学ぶ意義は大きい。今回の研修全体から、WBLとは、意識的に日々の仕事上の経験から学ぶこと、個人の学びを組織的に支援していくことであると理解できた。この概念は、医療制度は異なっているように思われる。この概念は、医療制度は異なっているように思われる。日本の看護の質の向上にも貢献することを確信している。

3. WBL研修における今後の課題

今回の研修では、WBLの考え方と、プライマリケア領域におけるWBLについて知る機会をもつことができた。次回は、セカンダリケア領域、すなわちHospitalにおいてWBLの理念はどのように活用されているのか、さらに、WBLによる医療の質の向上の効果の評価方法について理解を深めたい。また、看護教育については、特にWBLによるコースにおいて、臨床現場でどのようにして日常の看護業務を学習の素材として活用し学んでいるのか、またどのようにコースワークとしての質を保証しているのかなどについて、現場から学びたいと考えている。

文献

- 1) 斉藤康洋：英国のプライマリケア（下）—GPの生涯教育，日本医事新報4189；59-63，2004.
- 2) 前掲1)
- 3) 前掲1)
- 4) Birmingham Primary Care Trust：Heart of Birmingham Teaching 2004，2006-01-10，http://www.hobtpct.nhs.uk/careers/why_work_for_us/protected_learning_time.asp
- 5) Jonathan Burton, Neil Jackson: Work Based Learning in Primary Care, 6, 2003.

(受稿日 平成18年1月11日)

(採用日 平成18年3月6日)